

互いに異なる者同士を異なるままつなく  
当事者性のかたち

—朝鮮半島出身の在米高齢者移民とサンフランシスコ日本町—

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 小谷 幸子

# 互いに異なる者同士を異なるままつなぐ 当事者性のかたち

## —朝鮮半島出身の在米高齢者移民とサンフランシスコ日本町—

文化科学研究科・比較文化学研究専攻 小谷 幸子

### 1. はじめに

本研究は、これまで主に日系移民研究もしくは日系人研究の舞台としてシンボリックに描かれてきたジャパントウンとしてのサンフランシスコ日本町が、日本の旧植民地であった朝鮮半島を出身とする高齢者たちの生活拠点となっていることに着目する。その目的は、場所の多義性や人びとの多様な関係性のあり方を考えるうえで、ある特定の場所とある特定のエスニックな共同体を結ぶシンボリックな相関関係という従来の観点からはとらえきれない、個々人の文化的に錯綜した関係性構築の様相に光をあてることにある。

### 研究の背景

本研究の舞台となるサンフランシスコ日本町は、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市において日本町 (Nihonmachi)、ジャパントウン (Japantown)、ジェイタウン (J-town) といった名称で呼ばれる都市街区であり、全米に現存する三つのジャパントウンのなかでも最も古い歴史をもつことで知られる。そもそもは、19世紀後半から20世紀半ばにかけて、当時の人種差別的な政策から居住地区を制限され、サンフランシスコ大地震の被害から逃れてきた日本からの移民が寄り添って生活した場所であるが、戦中の日系人強制収容およびその後の都市再開発を経て、戦後は徐々にかつての「日本人町」としての面影をなくしていった。1980年代後期以降は途中、日本国内のバブル崩壊の影響も受けて、日本からの渡米者の減少や日系資本離れ、郊外化、世代交代、高齢化、日系ビジネスの後継者不足が進み、同じカリフォルニア州にある残り二つのジャパントウンと同じく、朝鮮半島や台湾などを出身地とする非日系移民テナントの増加や不動産所有が顕著にみられるようになった。地元の日系新聞の一紙は今年2006年元旦に新年特別企画として、サンフランシスコ日本町100周年特集を組み、その一面記事に「日本町の100年後は日本町？アジアタウン？」の文字を躍らせた（日米タイムズ日本語版 2006年1月1日付）。

このような傾向に連動して1990年代後半からみられる動きとして、「コミュニティ・リーダー」と呼ばれる日系の英語話者を中心とする地域の有力者たちの主導による文化保存活動があげられる。この取り組みは、サンフランシスコ日本町という文化的、商業的に独自性の高い地区を市民主導で保存、発展させていくという目的に関心をもつ、全ての地域の生活者に開かれた活動として位置づけられながらも、日本町の旧日系人集住地区としての歴史性を継承し、「日系アメリカ人」のシンボリックな心の拠り所たる場所性を創出するといった性格も兼ね備えている。ここで確認しておきたいことは、「日系アメリカ人」社会自体の多人種・多民族化である（武田 2006）。すなわち、この主体生成の動きそのものが「日系」なるものと「非日系」なるものの絡み合いのなかで編み出されており、それゆえに過去の記憶の掘り起こしや記念碑の建立といったシンボリックな側面が強調される傾向にある。一方で、対外的には他

の二つのジャパントウンとの連携のもとで、多文化主義を掲げる州政や市政を巻き込む方向で発展し、州政府は2001年にジャパントウンのエスニックな都市街区としての文化的意義を公に認めるに至った。現在はいかに日本町を人の集まる魅力的な商業地区にできるのかといった観点から地域経済振興に力を入れた活動が展開されている。

さらに今年2006年に生誕100周年を迎えてからのサンフランシスコ日本町は、資本の出入りに起因した変化の波に次々と見舞われている。なかでも今春にはこれまで35年以上にわたり日本町の半分以上に及ぶ不動産を所有し、日本町の文化保存委員会にも理事として名を連ねていた近鉄の米国法人が所有権の一括売却を発表した。そして、それをサンフランシスコの日系人社会とは全く縁のなかったロサンゼルスに拠点を置く不動産開発会社が購入したことで、「町の文化が失われる」という危惧と「町が活気づく」という期待の両方の声が日本町を覆った。また、中小企業レベルにおいても日本の親会社からの資本投入が突然打ち切られるケースが確認された一方で、日本の大手出版社が地元の歴史ある日系新聞の本社建物を買収し、現代的な日本のポップカルチャーセンターを建設するという計画も進んでいる。

## 研究の目的

このように、グローバルな資本主義に起因する流動的な資本、人の動きが顕著にみられる近年のサンフランシスコ日本町においては、多様なエスニックな背景をもつ人びとのかかわりあいを基調とした文化的に錯綜した日常性の文脈のもとで、場所を介した日系アイデンティティ<sup>1</sup>が創出されている。

これまでのジャパントウンを舞台とする研究は、いわゆる当事者の視点を重視する「日系人研究」、「日系移民研究」の枠組みのなかでおこなわれてきた。そのため、日系史の連続性を確認・継承する場所としてのジャパントウンのシンボリックな側面が強調されがちで、様々なエスニックな背景をもつ人びとの記憶や経験が重層して成立してきた場所であるという現実的な側面が具体的な記述として示される試みはほとんどなされてこなかった<sup>2</sup>。なぜなら、その行為は当該マイノリティの集団としての主体の弱体化をまねく恐れがあったからであると考えられる。エスニック・マイノリティによる主体性獲得・回復のプロセスを取り巻く社会的現実の厳しさについては、ここで改めて述べるまでもなく、その過程を意識的に着目してきた研究の社会的、学問的意義は大きい。

ただ、一方で筆者はサンフランシスコにおいてフィールドワークを行なうなかで、何かを共有する者たち同士をつながりとしての共同体像を、人びとがある一面では切実に求め強調しつつも、またある一面ではそれを想像する事に対して、現実的な生きづらさや行き詰りを覚えているという視点を強めた。そして、このような視点に呼応するかのように、従来の当事者研究が依拠してきたシンボリックな共同性に基づいた多様性の認識の枠組みでは、集団的記憶の領域に収斂しえない、断片的で自己矛盾を孕んだ場所をめぐる日常的な実践や関係性の様相を描ききれない。

上記のような経緯から、本研究では、ビジネスや福祉事業に支えられた現代的な日系商業空間という側面から、ジャパントウンを在米コリアン<sup>3</sup>研究の舞台として位置づけることを試みる。そうすることで、サンフランシスコ日本町を拠点としてビジネスや生活を営む在米コリアンに光をあて、彼女・彼ら個人々の記憶や経験に相互的な関係構築を通じて接近することで、当事者性の意味合いを問い直し、新たな多様性の認識方法を模索することが本研究の目的である。

## 2. 在米コリアン研究における商業空間

本研究の出発点は、筆者が米国で修士留学をしていた際にサンフランシスコ近郊の都市、オークランドにある朝鮮半島出身の高齢者移民が多く通う韓国系老人センターに出入りしていたことに端を発する。そこで出会った高齢者の多くは、先に米国へ移民してきた息子や娘に呼び寄せられて、定年後、1970年代半ばから1990年代半ばにかけて渡米してきた人たちであり、日本による植民地支配を朝鮮半島や台湾、中国本土、日本などの各地で経験してある程度の日本語能力を保持している人たちであった。このような人たちのなかには、日本町を目的地としてサンフランシスコへ足を運んだり、日常的にテレビや新聞といった日本語の現地メディアを韓国・朝鮮語のメディアと併用しながら情報収集し、仕事探しや商売をしたりする人が少なくなかった。また、日本語や日本に対する知識や経験がない子どもの世代が移民先の米国で日本食レストランを営んだり、日本を介する輸出入業に携わったりする手助けをしてきた人もかなりいた。

現に、サンフランシスコ湾岸地域にある日本食レストランの過半数以上は朝鮮半島出身の移民によって営まれており、通称コリアン・マーケットに陳列されている商品の約半数が日本からの製品であった。また、日系スーパーなどで配布されている日本語のフリーペーパーにも、そのようなレストランやスーパー・マーケットの広告が載っていた。しかしながら、在米コリアンがこのように日本製および日本的な食品、日用品、メディアなどの流通、販売、消費をめぐる諸局面にかかわっているという側面は認識されつつも<sup>4</sup>、研究における考察の対象としてはほとんど取り上げられておらず、先行研究に位置づけようとするのが困難が生じた。

その理由としてはまず、これまでの在米コリアン研究の依拠してきた分析枠組みの多くが、移民送出国、移民受入国という二つの国民国家の力学が反映されたものであり、それ以外の第三、第四の国に移民が関与している文化的、歴史的状況、生活実践、ネットワークの広がりほとんど考察の視野に入っていない点が多かったという点が挙げられる<sup>5</sup>。そして、この点については、在米コリアン研究がこれまで主に移民法改正以降の1965年以降、韓国から渡米した移民一世（韓国へその後帰国した者を含む）および米国で生まれた移民二世世代を中心とした「ネイティブ」の研究者によって担われ<sup>6</sup>、米国というナショナルな枠組みを前提として主流社会への対抗的な言説を生み出してきたエスニック・スタディーズという学問領域において、当事者研究のスタイルで発展してきたこととの関連性が考えられる（原尻2000、李2006）。

4人に1人が都市でなんらかのビジネスを営んでいるとされる在米コリアンの社会経済的位置はこれまでミドルマン・マイノリティという理論を通して理解されてきた（Bonacich and Light 1988, Min 1996）。これは、貧しいマイノリティを抑圧し排除する米国全体の社会経済構造のもとで利益の得るようなビジネス・ニッチを見つけ展開していく過程で、在米コリアンが周辺マイノリティとの摩擦を避けられない状況に位置づけられているという指摘である。この理論を踏み台として、特に1992年のロサンゼルス暴動以降は、都市においてビジネスを展開する在米コリアンの実践を、アフリカ系アメリカ人と呼ばれる人びとやラテン系、ヒスパニック系と呼ばれる中南米出身者らとの人種間関係の問題として扱う研究が増えた。（Ex. Abelmann and Lie 1995, Yoon 1997, Kim 2000, Lee 2002, Joyce 2003）。

これらの研究を含む在米コリアン研究の舞台は、近年、在米コリアンの著しい人口増が指摘される南部のアトランタやヒューストン<sup>7</sup>などのいくつかの例外を除くと、ニューヨーク、ロサンゼルス、ハワイ、シカゴの4都市に集中している。ハワイを除いてこれらの都市に共通するのは社会的に認知された比較



的、大きな規模の「コリアンタウン」あるいは「コリアタウン」と呼ばれる地区があることであり、このような調査地選定の傾向から、公に認識される規模のコリアタウンが存在しないサンフランシスコのような都市の在米コリアンを対象とした研究がこれまでなかった背景が浮かび上がる<sup>8</sup>。

また、人種の違いが強力な他者化の指標として働いてきた米国の人文・社会科学においては、「アジア (Asian)」というひとつの人種カテゴリーを付与される人びとを同一視する見方が存在してきた。その結果、在米コリアンを含むアジア系マイノリティと呼ばれる人びと同士の間には、「アジア系アメリカ人」という主流社会に対抗するための主体的アイデンティティの創出という人種的連帯性の文脈を超えては、これまであまり論じられる場がなかった。

本研究がサンフランシスコ日本町の事例を通して示そうとする、在米コリアンの商業空間や人と人の相互作用は、上に挙げた先行研究からこぼれおちた問題領域に重なるものである。また、その学問的意義や課題は、主流社会をめぐる西欧中心主義的な文化観に対する異議申し立てとしての当事者研究が主流を占めてきた学問領域において、筆者のように、一般に当事者ではないと位置づけられる立場の者がどのような貢献をすることができるのかという問いにかかわるものであると考える。そして、そのうえで参考になるのが、日本をフィールドとする韓国の人類学者であるという立場から、今日、否定できない事実として存在する非西欧的領域における人類学の実践や議論、国境横断的な研究者同士の相互関係性構築の可能性に目を向けることで、覇権主義的な他者表象に基づく西欧の学問としての人類学という見方を乗り越えようとするムンの論稿である (Moon 2006)。この議論において、彼女は研究者としての自身の立場を、従来の「西欧」対「非西欧」の枠組みに基づいた「私たち」と「彼ら」のいずれの立場にも位置付けられない状況を示す。そして、その認識そのものに、彼女が今後の可能性や発展性を見出している点については、日本で生まれ育ち、日本語で博士論文を書こうとしている筆者が「アメリカ人」でも「韓国人」でも、「コリアン・アメリカン」でもない立場から、人類学的な観点で在米コリアン研究に携わることの意義を考えるうえで有益な視点を与えてくれる。

### 3. 在米コリアン高齢者の居住・福祉・娯楽空間としてのサンフランシスコ日本町

#### 高齢者人口

サンフランシスコ日本町は曜日や時間帯によって、開いている施設も、集まってくる人びとの層も異なり、町の雰囲気も違う。そして、韓国・朝鮮語で「ハルモニ (おばあさん)」、「ハラボジ (おじいさん)」と呼ばれる高齢者たちは、主に平日の朝昼の日本町において、視覚的な存在感を示している人びとである。

ハンゲル読みでジャペントウンと呼ばれる日本町は、多くのハラボジ、ハルモニたちが居住することを希望する、サンフランシスコ市内でも特に人気の高い高齢者居住空間である。米国では10年ごとに日本という国勢調査にあたるセンサスと呼ばれる全戸調査がおこなわれている。サンフランシスコ日本町の文化保存活動を先導しているNPO団体が作成した報告書のなかで使われている2000年のセンサスデータによると、日本町の住人、全11,613人のうち、65歳以上の人口は24パーセントを占め、最多層である25歳から34歳の25パーセントに次いで多い (The Japantown Taskforce Inc. 2005)。また、このNPO団体の前身にあたる団体が、1990年のセンサスデータを用いて作成し、サンフランシスコ市の開発局に提出した人口データによると、日本町住民の平均年齢は45歳と市内平均の38.8歳よりも高くなっている (The Japantown Planning Preservation and Development Task Force 1999)。

## 高齢者住宅事情

ジャペントウン一帯の地域には、行政からの財政援助を受けた高齢者向け賃貸アパートや老人ホームが軒をつらねている。2006年4月に日本町に事務所をかまえる高齢者福祉サービスで得た資料によると、少なくとも日本町にはこの福祉事務所が高齢者に案内しているアパートが19箇所ある。これに加えて、筆者が把握しているかぎりでも、少なくとも、あと3箇所は日本町近辺にはハラボジ、ハルモニたちが居住しているアパートがあった。その多くが3年から10年という入居待ちの申請者リストを抱えており、なかには20年、30年待ちといわれるものもある。なかでも、ハルモニ、ハラボジらが「バーガーキング・アパート」と呼ぶハンバーガーショップに隣接するアパートは、100名ほどの在米コリアン高齢者が入居している人気アパートで、あるハルモニは、「何千ドルという賄賂をブローカーに払ってしか入れないから、私のような者は入れない」と筆者との雑談のなかで語った<sup>9</sup>。

このアパートは他の日本町にある多くの高齢者用アパートと同じように、生活保護を受ける低所得の高齢者でも入れるような賃料設定がなされており、本来の正規ルートで申請すれば、このハルモニが言うような余分なお金を請求されることはない。しかしながら、ハルモニ、ハラボジたちに聞き取りを続けるうち、現実的には、お金を持たないはずの高齢者から高額の手数料をとって、通訳や仲介業を非公式でおこなう人びとが移民社会内に存在することが明らかになった。この人たち自身が滞在歴の長い高齢者移民であることも多いようである。しかし、英語を不自由とする朝鮮半島出身の高齢者移民のニーズに応える公的なシステムが十分に整っていないという現状において、このような非公式の仲介業者に頼らざるをえない高齢者も少なくない。それは、高額な報酬やお礼を求められることに対する理不尽さを表現する人びとの存在とともに、それでも「助けてくれる方(도우주는분)」という言いまわしで感謝を示す人びとがいることにも表れている。

ジャペントウンがこれほどにもハラボジ、ハルモニたちに人気があるのには、もちろん理由がある。なかでもよく挙げられたのが、市内の中心地へもバス一本で乗り換えなしで行けるという交通の便のよさ、清潔で比較的、環境がいいこと、そして、日々の暮らしに必要な商品やサービスが近くで手に入る便利さであった。最後の点に関しては、食品や化粧品といった日本や韓国の商品を扱う店や、韓国・朝鮮語や日本語が通じる美容院や薬局があるということに加え、高齢者が安く昼食を食べられるところがあったり、困ったことがあったときに日本語や韓国・朝鮮語で気軽に相談をしに行くことができる窓口があったりといった、東アジア系の高齢者に特化した福祉サービスが揃っているということがある。

## 高齢者福祉サービス

サンフランシスコ日本町における高齢者福祉サービスを中心的に担っている組織が、「気持会」(Kimochi Inc.)である。高齢者への感謝の「気持ち」を名称の由来としてもつ気持会は、1971年に当時の日系三世の若者数人が、言葉や習慣の壁のために主流社会の社会福祉サービスを利用できずにいた一世の祖父母たちを助ける目的で始めた非営利の高齢者サポート団体である。それから35年たった今日では、市内でも有数の高齢者サービス団体として発展し認知度も高く、市からの補助金受給額もエスニック・マイノリティ向けのサービス団体としては群を抜いて高い。気持会は市内のみならず、サンフランシスコ湾岸地区のハラボジ、ハルモニにも広く知られている。筆者は修士課程時、オークランドのコリアン・シニアセンターでボランティアしていた際にも一度、シニアセンターの会長らに視察の依頼の中継ぎを頼まれて、一緒に気持会へ見学に赴いたことがあった。

事務所に置いてあった2005年3月改定との印刷がある、気持会の案内には、主に日系高齢者を対象と

し、日米両語のプログラムを行っているとの記述があるが、ソーシャルサービスプログラム、家庭介護登録プログラム、気持ホーム永久居住型・短期滞在型ケアプログラム、デイサービスプログラム、ランチ会食プログラム、ランチ宅配プログラム、送迎プログラム、シニアセンター活動など、個々のプログラムの利用に際して、特定の文化的背景をもつ人びとに限定されるようなものはない。原則的には、近隣地域に住む60歳以上でサービスを必要とする人であれば、誰でも利用ができるようになっている。現に、日系のコミュニティーセンターの1階フロアを使って行われているランチプログラムに関しては、来ているお年寄りの過半数以上が中国語を話す人びとであり、日本町に多く居住しているロシア出身の移民高齢者に対しても気持会はサービスを供給している。また、地元日系英字新聞においては、気持会を”the largest senior center in the Bay Area caring for the Japanese/Korean elderly population(日系およびコリアン系の高齢者を尊重したケアを提供するサンフランシスコ湾岸地域で最大のシニアセンター)”と紹介しているものもあり(Nichibe Times, August 19, 2004)、朝鮮半島出身者が気持会のサービスを利用していることも周知の事実になりつつある。

気持会の職員および前職員数人への聞き取りによると<sup>10</sup>、地域のコリアン住民のニーズが高まり、1999年ごろから気持会は韓国・朝鮮語のできるスタッフを一名雇用しはじめた。しかし、日本出身のソーシャルワーカーS氏は、1987年に気持会で勤務しはじめた当初からクライアントとして、かなりの数の日本語を話すコリアン・シニアを抱えていたと振り返った。日本語がそれほどできない場合でも、英語よりはましというケースが多く、病院の診察に通訳として付いていたり、希望に応じて、日本のお手伝いさんを中心に紹介したりもした。日本町近辺にあるコリアン・コミュニティー・センターやいくつかのコリアン系教会でも、同じようなサポートを行なっているようだったが、そこで十分なヘルプをもらえない人たちが、日本語のできる友人を通訳として連れてでも、気持会にやってくるという。

現在は3代目のコリアン・スタッフが約300名の登録クライアントを相手に働いているが、複数名いる日本語を話すソーシャルワーカーが常勤で比較的長い期間、勤続しているにもかかわらず、コリアン・スタッフが置かれている雇用状況はパートタイムでの採用であり安定していない。初代のコリアン・スタッフは当初、フルタイムで雇われた。近隣の韓人老人会やコリアン・コミュニティー・センターとも連携をとりながら積極的な働きかけをおこない、地域のハラボジ、ハルモニたちからの信頼も厚かったが、結局、気持会が予算カットに見舞われ財政的に苦しくなったことをきっかけにパートタイム雇用になり、生活を考えて別の職場へ移ったという経緯を、筆者は目の当たりにしている。また、筆者と同世代の女性であった2代目のスタッフは、韓国から留学生として米国にやってきて、サンフランシスコにて修士課程を終了後、気持会の事務所に程近い薬局に勤めていた。薬局にて高齢者の相手をする関係上、初代スタッフとも知り合いであり、韓人老人会の健康講座にボランティアのサポート役として参加するなど、気持会に雇われる前から在米コリアンの高齢者福祉の現場に出入りしていた。初代スタッフが気持会をやめたことで、この女性が薬局と掛け持ちをしながら、その業務を引継いだ。結局、就労ビザのサポートをしてもらえないということで半年にも満たないうちに、一般の病院へ就職口を見つけて転職していった。

## 娯楽と健康維持

ハラボジ、ハルモニの居住および福祉空間としてのジャペントウンについては、ここまで述べてきたとおりであるが、また同時に、ジャペントウンは比較的、健康な在米コリアン高齢者にとっての娯楽空間としても機能している。たとえば、サンフランシスコ日本町を歩いていると、そこかしこにあるカフェ



でよく高齢者が何人かいつもだいたい同じ曜日、時間帯に集まって、韓国・朝鮮語で談笑しているのを見掛けることがある。これは、「モイム (모임)」と呼ばれている集まりで、たいていは男女別にハラボジはハラボジ同士、ハルモニはハルモニ同士4～5人で集まっていることが多い。ただ単に気の合う者同士で毎日のように会う場合もあれば、退役軍人の会のように特定の目的をもったモイムもある。日本町の少し南にあるマクドナルドでは、毎週火曜日、木曜日、土曜日の午前10時からお昼の12時まで、ハラボジたちが集まって話をしていた。また、月に一回、オークランドに住む知人のハルモニたちがサンフランシスコのジャペントウンに出てきて行っているものにも遭遇したことがある。このモイムは、日系の100円均一ならぬ\$1ストアなどで買い物を楽しんだり、コリアン系ビジネスが集まるビルの地下のカフェで談笑したりしながら、そのすぐ上の階にあるコリアン移民のオーナーが営むカラオケ屋の開店を待ち、夕方の開店とともに店に入って2時間ほどカラオケを楽しんで帰るといったものであった。

ジャペントウンで出会ったハルモニ、ハラボジたちのなかには、スポーツジムに通う人たちも少なくなかった。1933年生まれのMハラボジもそうで、アパートの近くにあるスポーツジムで毎日、午後2時から4時まで水泳などの運動を習慣づけていた。同じスポーツジムには、妻を自宅介護していくうえでの体力を維持するために毎朝5時からのトレーニングを欠かさないといい同年代の男性もいた。そんなハラボジらに触発されて、筆者自身もサンフランシスコ日本町にあるYMCAに通うようになるうちに、介護をしながら体操クラスに参加していたハルモニと知り合うこともあった。

また、毎年5月に行われるコリアン民俗祭をはじめ、コリアン移民社会をめぐる行事があるときや、コリアン系の旅行会社の企画ツアーなどでは、送迎バスが必ずジャペントウンにとまる。そのため、市内のほかの場所に住むハルモニ、ハラボジにとっても、ジャペントウンが待ち合わせの場所となったり、娯楽行事の出発点および帰着点になったりすることが往々にしてあるのであった。

#### 4. 日本語を介した多様なつながりの様相

日本町で出会ったハルモニ、ハラボジたちの多くは、就学時に日本による植民地支配を直接的に経験した世代であり、英語よりも日本語を得意としていた。博士課程に進んで学業にいそんでいた娘の子どもの世話をするために、1978年に夫とともに渡米してきたHハルモニは、孫の子守で英語の勉強どころではなかったという。彼女は、1926年に現在の北朝鮮東部の町、咸興(ハムフン)で生まれた。「大東亜戦争」中に師範学校へ通って、卒業後は教師生活をし、23歳のとき結婚した。師範学校の修学旅行で日本へも行ったことがある。

筆者とは主に韓国語で話をしていたが、Hハルモニは筆者が「何年ごろ日本に行きましたか?」と韓国語で聞くと、急にひとりごとのように日本語を言い出し始め、次のように答えた。「大東亜戦争が終わる前年の年に女学校を卒業して、その1年後に師範学校に入って…、그래 해방전에 들어왔거든요 (そう、解放前に行ってきたんですよ)」<sup>11</sup>

このように、植民地時代の記憶を彼女は、日本語という言語を使うことで思い出し語った。しかし一方で、日本語はHハルモニにとって過去の記憶を想起するきっかけとなる言語にとどまらず、現在進行形で人とつながり、生活を構築していくための言語でもあった。ここでは、特に彼女が通いつづけていた日本町の薬局の薬剤師で日系二世のMさんとのかかわりという事例から、互いに異なる意味合いをもつ第二言語としての日本語が、コミュニケーション言語として機能してきた事実についてとりあげる。

Hハルモニがドクター Mと呼ぶ日系二世薬剤師のMさんは、筆者が接してきた他のハラボジ、ハルモ



二らからも絶大な信頼を得ていた。Mさんに直接会って、話をうかがってみると、Mさんの父親は日本からの移民一世で、戦前からサンフランシスコ日本町でNippon Drugという薬局を営んでいた。1945年、第二次世界大戦が終了し、収容所から帰ってきた後すぐに父親は薬局を再開したが、Nippon Drugという名前は当時の米国内での嫌日感情を考えると、そのまま使うことはできず、Jim's Drugという名前に変えて、店を開けた。

Mさんは1937年にサンフランシスコで生まれた。ユタ州の大学を卒業し、その後1962年から1963年の2年間は米軍に召集された。その間、父親はもうすでにパーキンソン病にかかっており、仕事ができなくなっていたので、兄が店を引き継いだ。1969年にジャパンセンターというショッピングモールが日本町にできたことを機に、Mさんはそこでの店の運営にかかわるようになった。インタビューの時点では、もう退職して日本町の店もたたんでいたが、日本町の近くにある一般のスーパーマーケットチェーンの薬局部でパートタイム薬剤師として仕事を続けていた。筆者が知るハラボジ、ハルモニたちもJim's Drugが日本町からなくなっても、Mさんに薬を調合してもらうために、このスーパーマーケットへ足を運んでいた。

筆者はMさんと英語でインタビューを行なったが、Mさんがハラボジ、ハルモニたちとコミュニケーションをとるときは通常、日本語である。しかし、Mさんが言うには、その日本語はとても流暢なものではなく、それをコリアンの高齢者たちも知っていたということだった。父親の方針で日本語学校へ行かされたが、戦後は日本人に対する差別が厳しく、日本語で話すことは好ましく思われない雰囲気があったため、積極的に話したり、勉強したりすることを拒否していたという。

Mさんの日本語をめぐるこのような境遇は、Hハルモニが植民地時代に日本語を勉強することを余儀なくされ、かなりのレベルの日本語を習得するに至るも、解放後、日本からの文化的影響を意識的に断絶することで国民形成をはかった朝鮮半島内の反日的な機運から、日本語を公に使うことがはばかれたという状況にも呼応するものがある。このような日本語を使うということに伴う歴史的な意味合いに起因する心理的な負担は、Hハルモニの筆者に対する対応からも推し量ることができた。通常、二人で話をするときは、彼女は韓国語を利用する際でも筆者の名前に関しては日本語で「幸子さま」と呼んだ。しかし、筆者がもし彼女の自宅に電話するようなことがあって、電話口にHハルモニと同居する娘が出たら、「幸子」とそのまま日本語読みで名乗るのではなく、ハングル読みで「ヘンジャ」と読んで名乗るようにと言われていた。その意図は、筆者が「ヘンジャ」と名乗り韓国語で話せば、娘に日本人と付き合っていることを知られて説明を求められることもないと考えたのではないだろうか。

一方、互いに流暢とはいえない日本語を介してコミュニケーションが成立しているMさんとHハルモニをはじめとするコリアンの顧客との関係であるが、同時に彼、彼女らをつないでいるのは必ずしも言語だけではないことも、Mさんの語りから浮かび上がってきた。

Mさんによると、1970年代後半から1980年代初期にかけてが、最初にコリアンの顧客を見かけるようになった時期だという。1990年代末になると、処方箋業務の方はその顧客のほとんどがこのようなコリアンになっていた。その背景には、日本町にコリアン・ドクターの診療オフィスがいくつか集中していて、そのドクターとの関係もあった。主な顧客層は、当初から日本語をある程度話せる高齢者であったが、Jim's Drugがコリアンの顧客を獲得してきた要因は、一般の薬局にはない日本の薬品を置いているという、彼の言葉でいう「ニッチビジネス」的な要素が少なからず起因しているというのだ。確かに、筆者が接してきたハルモニ、ハラボジたちの間では目薬や化粧品といった類のものを含め、日本製の医薬品を愛用しているケースが少なくなかった。

しかし、そのように語りつつ、一方では近くにコリアンの薬局もあるのに、どうして僕のところに来るのかとMさんは頭をかしげた。筆者が「コリアンの高齢者に聞いてまわると、Mさんはとても評判がいいんですよ」と言うと、彼は次のようにこたえた。“You want to treat your customer as you want to be treated(自分がしてもらいたいように顧客を扱いたいでしょう)”と言った。だから、彼はできるだけ顧客のために時間をさき、親身に話を聞くようにしてきたのだという。つまり、HハルモニとMさんの関係性は、日本語という共通の言葉を介するがゆえに成り立ってきた側面をもちつつも、日々のやり取りを通して培われてきた極めて常識的でありふれた、人間同士の信頼関係にたどりつくものであったともいえる。

## 5. おわりに

上記でとりあげた事例からは、エスニックな属性やそれに基づく集合的なアイデンティティに基づく多様性の文脈だけに頼ってはいては見えてこない、多様なものが錯綜する社会が現実として生み出している繊細な異種性の重なり合いの部分を垣間見ることができる。そして、それは、特定の空間に存在することの公的な承認を求めるといった文脈とはまた別の次元で、朝鮮半島出身の高齢者移民たちが現代日系商業空間としてのサンフランシスコ日本町の構築に関与してきた側面が浮かび上がる。

その場所を介した独自の経験や記憶の様相は、個人のライフヒストリーの奥深さを反映する、非常にパーソナルな側面をもつものであった一方で、ただ単に多様な個々人の多様な物語という帰結に落ち着くものでもない。そこに筆者が見るのは、互いに異なる文化的背景をもつ者同士がそのまま接しあう連関性であり、その連関性の可視化を可能とする多様な関係性の物語である。

すなわち、カテゴリー化されて認識される社会的な差異とのせめぎあいや、構造的な抑圧と被抑圧の関係性の記憶、複数の互いに矛盾を孕む日常実践や権力関係の重なり合いなどのもとで、異なる個と個の間に異なったままで存在するつながりを見出していく研究の姿勢を意味するといえよう。

<sup>1</sup> 日本から移民して国外に居住する日本人を祖先とする人びとおよびその子孫を意味する「日系人」のアイデンティティにグローバル化がおよぼす影響については次を参照のこと。レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キクムラ＝ヤノ、ジェームズ・A・ヒラバヤシ編（移民研究会訳）2006『日系人とグローバリゼーション：北米、南米、日本』人文書院。

<sup>2</sup> 南川はロサンゼルスのリトルトーキョーが日系アメリカ人にとって「エスニック・タウン」として確立した背景には、エスニックな境界と内容が空間的にシンボル化され、実践された過程が存在したと指摘し、ロサンゼルスという多民族都市を 코리아タウンやチャイナタウンなど、エスニックに象徴化された場所のモザイクとして把握する方法が、実際には多層的であるはずの場所の経験をモノエスニックな物語で塗りつぶし、そこに作用した序列的な人種編成の実践を隠蔽・忘却させてしまいがちな点に注意を促している。（南川文里、2002、「エスニック・

タウンと「インターエスニック」関係—1910年代末日系移民による矯風運動にみる人種編成—」日本移民学会第12回年次大会分科会Aレジュメ）

<sup>3</sup> 本稿では、米国在住の朝鮮半島出身の移民およびその子孫を在米コリアンと呼ぶ。フィールドでは韓国語で「ハニン（한인）」および「ハングックサラム（한국사람）」、英語では“Korean”や“Korean American”という複数の言葉が話者の立場やその時々の使用言語や状況に応じて併用されている状況がうかがえる。また、海外に住む朝鮮半島出身者に対する呼称をめぐるのは、研究者のあいだでも移民時期、出身地、政治的背景、移民先などさまざまな観点から検討が加えられ議論が続いている。林は大韓民国で近年、多用されるようになった「韓人」という用語について以下の論文で説明を加えている。林史樹、2006、「増殖する「韓人」：朝鮮系移民はどこに帰属するのか？」『神田外語大学紀要』18:89-108。また李はハワイのコリアン・アメリカンにとって「コリアンであること」

の意味の変遷を記述・分析するなかで、当事者レベルで現在のコリアン・アメリカンを見てみると、米国への帰属を主張する人々も含め、自らを「韓国人（ハングックサラム）」と呼び、大韓民国出身の「韓国人」であることとコリアンであることを同一視する見方が一般化しており、現在のコリアン・アメリカンというカテゴリーを「韓国人であること」と「アメリカ人」であることという二つの国民国家が交錯する地点での「名付け」と「名乗り」の力学が働くものと指摘する。李里花、2006、「コリアン・アメリカンの「コリアンであること」の意味—現代の移民社会と国民国家」『アジア遊学 世界のコリアン』92: 96-108。

<sup>4</sup> 原尻は、米国の都市のなかでも最も資源獲得が困難であり、物価が高いハワイにおいて、在米コリアンが日本語の学習などによってコリアン以外の人びとの関係性を作り、生活基盤を安定させたり、日系人や日本からの観光客にかかわりながらビジネスを展開したりしていることについて報告している（原尻英樹、2000、『コリアンタウンの民族誌—ハワイ・LA・生野』、ちくま書房、pp.154-155）。また、このような記述は語りのかたちにおいて、在米コリアンのライフストーリー・ライフヒストリー集にもよく見られる。例：Elaine H. Kim and Eui-Young Yu, 1996 *East to America: Korean American Life Stories*, New York: The New Press.

<sup>5</sup> この傾向は、現在の在米コリアン研究の主流領域となっている、米国移民法の改正を契機にアジアやラテンアメリカからの移民が本格化した1965年以降についての議論において特に顕著である。移民史の領域においては、100余年前にはじまるハワイへのプランテーション契約に由来する初期移民に関する研究の蓄積があり、このような文献においては、日本による朝鮮半島の植民地支配をめぐる抗日運動の重要な拠点として、サンフランシスコをはじめとする海外の移民社会が機能したことが中心的なテーマとして取り上げられている。

<sup>6</sup> 1990年代末ごろからはグローバル化、ディアスポラといった概念の広がりとともに、日本においては「海外コリアン」、「世界のコリアン」という観点からの在米コリアンへのアプローチが顕著になりつつある（例：朝倉敏夫代表 平成15年度～18年度科学研究費補助金による共同研究「グローバル化時代における海外コリアンのホスト社会への適応と葛藤」（基盤研究(A)(1)、課題番号15401339)、原尻英樹編『世界のコリアン』アジア遊学92、勉誠出版）。また、この動きは移民送出国としての韓国国内の政策や研究の動向とも呼応しており、在外同胞財団理事長の李光奎氏をはじめとして、研究者らが「在外同胞」、「在外僑胞」、「在外韓人」という概念を使った研究を展開している。

<sup>7</sup> センサスによると、1990年から2000年の10年間のあいだに米国南部において、Korean Americanのカテゴリーに入る人びとの数は46パーセント増加した。（出典：Eric

Lai & Dennis Arguelles (Eds.), 2003, *The New Face of Asian Pacific America: Numbers, Diversity & Change in the 21<sup>st</sup> Century*, Asian Week.)

<sup>8</sup> サンフランシスコは飛行機が一般的ではなかった時代から、米国本土においていち早く移民を受け入れてきた港町として歴史ある町として知られるものの、意外に移民研究ではほとんど取り上げられてきていない。ヒラバヤシらが指摘するように、サンフランシスコの日系人を対象とした研究やサンフランシスコ日本町を舞台とする研究も同様に驚くほど数が少ない（ヒラバヤシほか2006）。

<sup>9</sup> 2005年8月9日の筆者のフィールドノートの記録による。

<sup>10</sup> 2003年11月11日、2005年7月9日：R氏への聞き取り、2005年6月28日：E氏への聞き取り、2005年8月2日：S氏へのインタビューから得た総合的な情報による。

<sup>11</sup> 2005年7月7日、Hハルモニとのインタビューより。

<sup>12</sup> 2005年7月12日に、Mさんとのインタビューをおこなった。

#### 参考文献（外国語文献の和訳は筆者による）

##### \* 日本語文献

アルフォンソ・リングス（野谷啓二 訳）

2006 『何も共有していない者たちの共同体』 洛北出版。

西井涼子

2006 「社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ」西井涼子・田辺繁治編『社会空間の人類学—マテリアリティ・主体・モダニティ』pp.1-29、世界思想社。

小谷幸子

2006 （近刊）「子どもコーナーから見た多様なつながりの形」*Senri Ethnological Report*.

武田興欣

2006 「イントロダクション」『日系アメリカ人リーダーシップ・シンポジウム報告書：「芸術からビジネスまで：多様な職業を通じた日系アメリカ人の貢献」』pp.8-13、国際交流基金日米センター。

林史樹

2006 「増殖する「韓人」：朝鮮系移民はどこに帰属するのか？」『神田外語大学紀要』18:89-108。

原尻英樹

2000 『コリアンタウンの民族誌—ハワイ・LA・生野』ちくま書房。



原尻英樹

2000 「コリアンタウンの比較研究：新たなエスニシティ論に向けて」『アメリカの多民族体制：『民族』の創出』五十嵐武士編、東京大学出版会。

南川文里

2002 「エスニック・タウンと「インターエスニック」関係—1910年代末日系移民による矯風運動にみる人種編成一」日本移民学会第12回年次大会分科会Aレジュメ。

李里花

2006 「コリアン・アメリカンの「コリアンであること」の意味—現代の移民社会と国民国家」『世界のコリアン』原尻英樹編、アジア遊学92: 96-108、勉誠出版。

レイン・リョウ・ヒラバヤシ、アケミ・キムラ=ヤノ、ジェイムズ・A・ヒラバヤシ編（移民研究会訳）

2006 『日系人とグローバリゼーション：北米、南米、日本』人文書院。

## \* 英文文献

ABELMANN, Nancy and John LIE

1995 *Blue Dreams: Korean Americans and the Los Angeles Riots* (ブルードリーム：コリアン・アメリカンとロサンゼルス暴動), Cambridge: Harvard University Press.

BONACICH, Edna and Ivan LIGHT

1988 *Immigrant Entrepreneurs: Koreans in Los Angeles, 1965-1982* (移民企業家：ロサンゼルスのコリアン：1965-1982), Berkeley: University of California Press.

JOYCE, Patrick D.

2003 *No Fire Next Time: Black-Korean Conflicts and the Future of America's Cities* (ノーファイアー・ネクスト・タイム：黒人—コリアン間の対立とアメリカの都市の将来), Ithaca: Cornell University Press.

KIM, Claire Jean

2000 *Bitter Fruit: the Politics of Black-Korean Conflict in New York City* (苦い果実：ニューヨーク市における黒人—コリアン間対立の政治), New Haven: Yale University Press.

KOTANI, Sachiko

2000 *Life Histories of Elderly Korean Immigrants: Place Attachment and Japanese Imperialism* (韓国系高齢者移民のライフヒストリー：場所の愛着と日本帝国主義), Master's Thesis, California State University,

Hayward.

LEE, Jennifer

2002 *Civility in the City: Blacks, Jews, and Koreans in Urban America* (都市における常識—アメリカ都市部における黒人、ユダヤ人、コリアン). Cambridge: Harvard University Press.

MIN, Pyong Gap

1996 *Caught in the Middle: Korean Merchants in America's Multiethnic Cities* (真ん中にはさまれて—アメリカの多民族都市における韓国系商人), Berkeley: University of California Press.

MOON, Okpyo

2006 "Neither 'Us' nor 'Them': Koreans doing Anthropology in Japan (「われわれ」でも「かれら」でもなく：日本で人類学を行なう韓国人たち)" In *Dismantling the East-West Dichotomy* (東—西の二項対立を打ち崩す). pp.119-124. Edited by Joy Hendry and Heung Wah Wong, Routledge.

The Japantown Task Force, Inc.

2005 *Senate Bill 307 Neighborhood Cultural Preservation Report for San Francisco's Japantown* (議会法案第307号 地域文化保存レポート・サンフランシスコ日本町).

The Japantown Planning Preservation and Development Task Force

1999 Japantown Community Demographic Information, Demographic Data (日本町地区人口情報：人口データ) <http://www.jtowntaskforce.org/jtf.community.dem.info.pdf>

YOON, In-Jin

1997 *On My Own: Korean Businesses and Race Relations in America* (自分だけの力で：アメリカにおけるコリアンビジネスと人種関係), Chicago: University of Chicago Press.

## \* 韓国語文献

윤 택림

1995 "탈식민 역사쓰기 : 비공식 역사와 다중적주체 (脱植民地主義の歴史記述 : 非公式の歴史と多重の主體)", 『한국문화인류학 (韓国文化人類学)』 27 : 45-78.